

昭和 42 年度土木 学会登載懸賞論文 の審査を終わって

土木学会誌編集委員会
委員長 増岡康治

はじめに

土木学会創立 50 周年を記念して始めた懸賞論文の公募が非常に好評を得て、毎年ぜひ実施しようとの申合せとなり、ここに 4 回目を迎えて学会の年中行事の一つとして、かなり定着してきたように思われる。しかし毎年のことながら論文テーマの選定には編集委員一同大いに頭を悩ませ、このさい「テーマそのものをまず公募したら……」などの珍案も出る始末であった。

今回は例年とやや趣きを変え、53 巻 1 号つまり新年号特集と同じ課題を選ぶことに決めた。本号の特集を見られると、それが十分に成功したように考えるが、いかがなものだろうか。

学生の部はいろいろ

協議したが、とかく夢がないといわれる現代の学生諸君に、きたるべき 21 世紀の土木技術について、若々しい論陣をはって貰うつもりでいた。しかしながら一般の部は例年どおり十数編の応募をみたにもかかわらず、学生の部は何と一編という昨年を下まわるはなはだ期待はずれの結果となってしまった。せっかく設けた学生の部も、今後その存続について論議される素地が作られてしまったことを惜しみたい。

ともあれ、集まった論文を編集委員会の内部から選ばれた審査委員（増岡康治、粟谷陽一、森 忠次、服部昌太郎、岡田哲夫）が 11 月 14 日、某所の一室に缶詰となり、約 6 時間にわたって個々の論文を検討した。各審査委員が番号だけで区分した各論文を一通り通読し、やや時間をおいて考えを整理したのち討議に移り、それぞれの論文の長所、短所についてきたんのない意見を交換、調整して決定をみたのが下記の論文である。

論文の質は歴年向上しているようであるが、課題が広範な内容を含むために必ずしも当を得ていない論文も散見されたのは残念であった。以下最終結果と内容について各審査委員が述べられた概略をご紹介します。報告を終りたい。

末筆ながら応募者各位の熱意に深甚の敬意を捧げて筆をおく。

入賞者名簿

(1) 課題 一般の部「専門の分化と総合」入賞者

一席 佐藤 亮典君 正会員 日本道路公団岩槻工事事務所長
（43 才）

土木学会誌第 53、 54 巻表紙デザイン の審査を終わって

土木学会誌編集委員会
委員長 増岡康治

はじめに

土木学会誌の表紙デザインを公募する企画が委員会の中に生まれようとしたとき、一体応募者があるのか、もしなかったらどうしようかという慎重論が出た。しかし、結果は予想に反して、どちらかといえば、応募者が多勢になるだろうと考えられた“論文”より、表紙デザイン部門のほ

うが多く、企画が成功したことをよろこんだ次第である。

応募者の多くは若い会員諸氏であったが、50、60 代の会員諸氏からの作品もあり、実に多くの方々のご賛同を得られたことを感謝している。募集要項では“黒一色を含む二色刷を基本色としてデザインをすること”ということ、背表紙に特集名を印刷できるスペースを設けること以外にとくに制限を設けなかったが、提出された作品の多くのものには、一脈相通ずるデザインポリシーがあった。このことは、ここ 6 年にわたり同一デザイナーにより図案化された「土木学会誌の表紙」のイメージが会員諸氏の脳裏にあり、とくに制限をもたない今回の募集においても、このイメージが割合大きく背圧として働いたように見受けられた。

今回入選された諸氏の作品および氏名、所属等は、会

二席	わたなべ ともよし 渡辺 具能君 (26才)	正会員	運輸省大臣官房 開発課
佳作	たかはし ひろなお 高橋 宏直君 (32才)	正会員	明石工業高等専 門学校助教、 土木教室
佳作	しまだ きしゅうろう 島田喜十郎君 (35才)	正会員	神戸市企画局調 査部主査

(2) 課題 学生の部「21世紀の土木技術」入賞者

二席	いとう はじめ 伊藤 一君 (21才)	学生会員	京都大学工学 部土木工学科3 回生
----	---------------------------	------	-------------------------

内容に対する総括意見

(1) 一般の部

a) 一席 佐藤 亮典君

問題の把握が適確で非常に勉強しており、応募論文中もっとも内容が豊富かつ整理・分析されている。深い経験と豊かな知性にささえられ一貫した論理が展開され、分化と総合は機能的に両立するとし、管理的地位と反しないスタッフ尊重の技術給与体系の確立をくり返し説き共感を呼ぶ論文であるが、その緻密性ゆえに表現の一部に生々しすぎる点があることが惜しまれる。

b) 二席 渡辺 具能君

専門技術者に豊かな知識を——とサブタイトルにうた

い、科学技術の専門化現象、総合化の必要性、今後の技術者のあり方、土木技術と社会科学の4章にわたり該博な知識を駆使して論じている。説得力もあり、いわゆる読ませる文章であるが、具体性にやや欠けること、他からのデータ引用が多すぎ、独創性が少ないと思われること、で二席となった。一席と併載しては、との声もあった勇気づけられる好論文であったことを付記しよう。

c) 佳作 高橋 宏直君

「総合された土木技術」と行政との「再結合」が必要であると、教育の場と技術者の活動の場に分けて意見と提案を行なっているが、常識的すぎる嫌があること、論点の掘下げが不足していること、やや無責任な提案が散見されること、などの意見に支配され佳作となる。

d) 佳作 島田喜十郎君

分化の必然性、技術の大型化、技術開発の方向、技術開発における人的資質の向上、研究態勢のあり方、などの問題を土台に総合化における相乗効果の発揮に論を進めているが大型化、拡大化に観点をうばわれすぎ偏向性がみられる点が問題であろう。

(2) 学生の部

a) 二席 伊藤 一君

一編だけということがプラスとなった面なきにしもあらずだが、21世紀の夢を極地土木工学に託した論文である。論旨は必ずしも一貫しておらず文体も練られたとはいえないが、雪、氷などに対する愛着に包まれた学生らしいロマンがある。努力賞といったところだろう。

誌第52巻第10号の口絵欄とニュース欄に発表したとおりである。ここに、各作品についての審査意見等を記してみたい。本企画は今回好評を得ることができたので、次回にまた新しい表紙デザイン募集を行なうことも考えられるので、図案の腕を各位がみがかれるよう付記して新春放言としたい。

入賞者と作品に対する総括意見

(1) 入賞・塩見武弘君の作品

第一席作品として、土木学会誌第53,54巻の表紙となるデザインである。本作品については、作者の言葉にもあるとおり、Civil Engineeringの“C”をパラボラを参考にデザインしたもので、結果論ではあるが一番すっきりしていた。ただ、図案の基本であるカーブを使用し

ている関係上、これに似たものが無きにしもあらずという少数意見があった。なお、本表紙デザインは一部専門家の意見にしたがい文字の位置等を変更した。

(2) 佳作(小見山幸男、伊佐治 敏、大泉 楯、菅原信男の各君)

小見山君の作品は、作品の仕上り、細部までの配慮のゆきとどいている点、全応募作品中第一級のものであった。ただ、図案があまりにも細かい点がおもしろいところである。

伊佐治君の作品は大胆な点、仕上りのあざやかさ、若々しさは抜群である。

大泉君は4点を提出されたが、ポピュラーな点が共感を呼んだ。

菅原君の作品は、図案が橋梁に限られている点が残念であった。